

盲学校（視覚特別支援学校）寄宿舎における生活指導の現状と課題

大 城 英 名

The Current Situation and Issues on Civil Life Education at Boarding Houses of Special Support Schools for the Visually Impaired

OSHIRO, Eimei

Abstract

The purpose of this study was to investigate the current situation and issues on civil life education at boarding houses of special support schools for the visually impaired. It was carried out a questionnaire survey to boarding house's stuffs of the special support schools. The main findings were as follows: (1) Pupil/student's percentage at boarding houses, upper secondary students was 64.2 % and 22.9% of lower secondary students, 12.9% of primary school pupils. (2) The power boarding house's stuffs would like to bring up for students of boarding houses was basic daily living skills, acquisition of the sociality and independence, initiative, prosocial behavior and communication ability. (3) As a problem at boarding houses, it was pointed out the student's decrease at boarding houses, and severely disabilities student's increase. These findings discuss that the problem and issues related to the civil life education at boarding houses of special support schools for the Visually Impaired.

Key words : special support schools for the visually impaired, civil life education, boarding houses

I はじめに

近年の寄宿舎の動向として、舎生の入舎理由が多様化していることがある（小田，2005；小野寺，2013）。通学困難の保障のみならず、教育的配慮や家庭事情により、寄宿舎への入舎を希望するケースが増えてきているとされている。保護者は多様なニーズに対応する寄宿舎を求め、実践においては舎生の自立や社会性の獲得を求めていると指摘されている（小野寺・高橋，2010）。

寄宿舎は、舎生一人一人のニーズに応じた自立と社会参加の力を育む場である。そのため、学校、家庭、地域の連携により生活支援と発達支援が推進されている。しかし、寄宿舎においては、舎生の社会生活に必要な指導の充実（北海道教育委員会，2008；島根教育委員会，2005）、寄宿舎と関係機関等で連携協力した指導の充実（北海道教育委員会，2008；島根教育委員会，2005）など、なお一層の生活指導の改善・工夫が求められている。

寄宿舎は、舎生にとって仲間との共同生活を通して社会的自立を培っていく場でもある。一方、寄宿舎指導員にとっては舎生の自立と社会参加の力を育む生活指導の場である。

寄宿舎における生活指導といっても、障害種により生活指導の内容や方法は、独自の合理的配慮が必要とされ

る。すなわち、舎生一人一人の障害特性に応じた生活指導が求められるのである。そのため、障害種別の特別支援学校寄宿舎における生活指導がどのように行われているか実態を明らかにし、その支援の在り方を検討していくことが必要である。

例えば、知的障害特別支援学校の寄宿舎における生活指導では、舎生の生活指導の内容、指導の体制（指導員の専門性、指導員と関係者との共通理解、個別の指導計画の活用状況）などが分析・検討され、その現状と課題が明らかにされている（萩原，2009）。

しかし、視覚特別支援学校の寄宿舎における生活指導については、これまで全国規模の実態調査は実施されていないのが現状である。

視覚障害のある児童生徒にとって、同じ障害のある友達や、同じ障害のある教員の存在はきわめて重要である。視覚障害は低発生の障害であることから、同じ障害のある児童生徒が切磋琢磨しながら成長できる集団は大切である。このような観点から、寄宿舎生活にも積極的な意義があり、生活指導の内容と方法の充実を図っていくことが重要である。

本研究では、視覚特別支援学校の寄宿舎における生活指導の現状と課題を明らかにし、今後の寄宿舎における生活指導の在り方について検討することを目的とする。

Ⅱ 方法

(1) 調査対象

全国盲学校（視覚特別支援学校）寄宿舎（66 舎）を対象とした。

(2) 調査期間：平成 25 年 6 月～7 月。

(3) 調査手続き：寄宿舎の生活指導に関するアンケート調査票を郵便により送付し、回収を行った。調査への責任回答者は主任寄宿舎指導員とした。返送のあった寄宿舎 66 舎中 57 舎（回収率 86.4%）を本研究の分析対象とした。

(4) 調査内容：調査内容は、①寄宿舎の現状、②寄宿舎の目標、③舎生に育みたい力、④寄宿舎の生活指導の内容、⑤寄宿舎独自の指導計画、⑥生活指導の取組の工夫、⑦家庭との連携、⑧学校・学部との連携、⑨寄宿舎指導員の専門性の向上、⑩寄宿舎の課題、である。

Ⅲ 結果と考察

(1) 寄宿舎の現状

① 舎生の学部ごとの在籍数と割合

全国盲学校（視覚特別支援学校）寄宿舎における舎生 1031 名の学部ごとの割合は、高等部舎生が 662 名

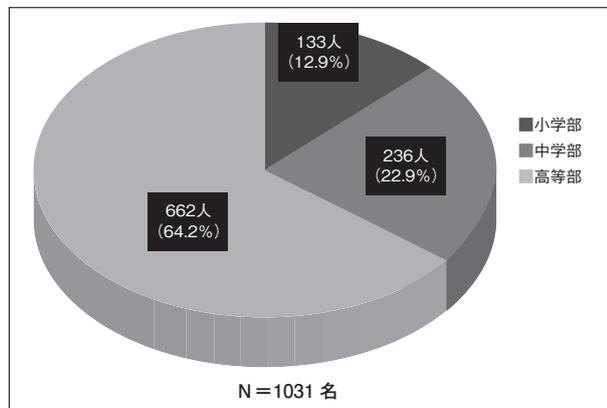


図1 舎生の学部ごとの人数と割合

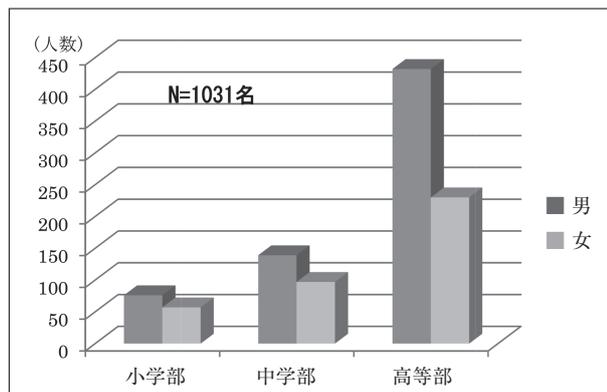


図2 学部における性別ごとの人数

(64.2%) で、中学部は 236 名 (22.9%)、小学部は 133 名 (12.9%) であった (図 1)。

また、舎生の性別では、男子舎生が女子舎生に比べ多く、特に高等部では男子舎生 432 名 (66.8%) が女子舎生 230 名 (35.7%) の 2 倍近くを占めていた (図 2)。

このことから、盲学校（視覚特別支援学校）寄宿舎は 6 割強が高等部生で占めており、また男子舎生が女子舎生の 2 倍近くいることが分かる。

② 通学にかかる時間別の舎生数

舎生の通学にかかる時間別の舎生数を見ると、舎生 1026 名中、1 時間以上～2 時間未満が 519 名 (50.6%)、1 時間未満が 304 名 (29.6%)、2 時間以上が 203 名 (19.8%) であった (図 3)。

この結果から、通学面において、舎生の 8 割は 2 時間未満の通学圏内で、2 時間以上の遠距離の舎生は 2 割弱である。寄宿舎の役割として通学困難への保障があるが、現状としては遠方からの舎生が必ずしも多いとはいえない。

このことは、寄宿舎における役割が、舎生の通学困難を保障することもあるが、実際は、それ以外のニーズへの支援（生活支援、発達支援、家庭事情など）が大きく求められていると考えられる。

③ 寄宿舎における舎生数

各学校の寄宿舎における舎生数は、57 校中、10～19 名が最も多く 30 校 (52.6%)、次いで 1～9 名が 11 校

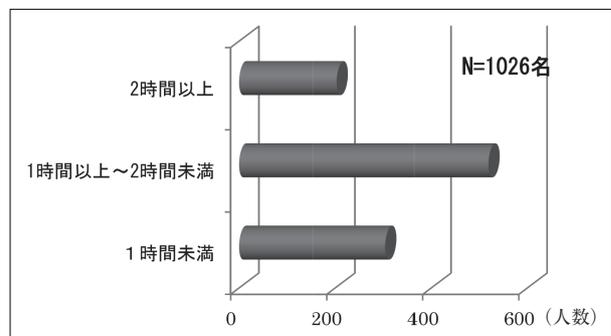


図3 通学にかかる時間別の舎生数

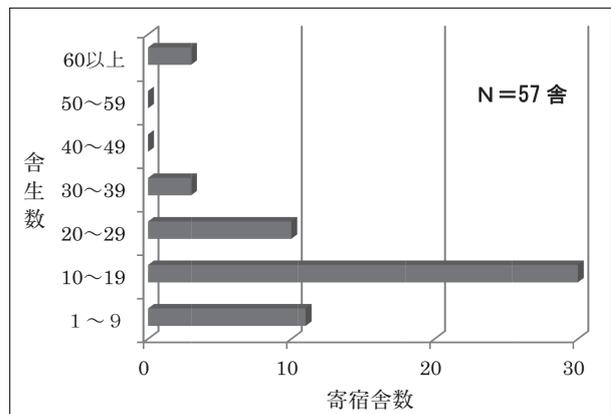


図4 寄宿舎における舎生数

(19.3%), 20～29名が10校(17.5%)であった(図4)。

この結果から、現在、舎生19名以下の寄宿舎が41校(71.9%)あり、舎生の減少は全国的な傾向であるといえる。

④雇用形態別における寄宿舎指導員数

学校における寄宿舎指導員の雇用形態別の人数について示した(図5)。

その結果、正規寄宿舎指導員では、57校中、5～9名が最も多く28校(49.1%)、次いで10～14名が15校(26.3%)であった。一方、臨時寄宿舎指導員では、49校中、1～4名が最も多く31校(63.3%)、次いで5～9名が18校(47.1%)であった。

このことから、正規寄宿舎指導員が少ない寄宿舎では、臨時寄宿舎指導員を採用して支援体制を整えていることが認められる。

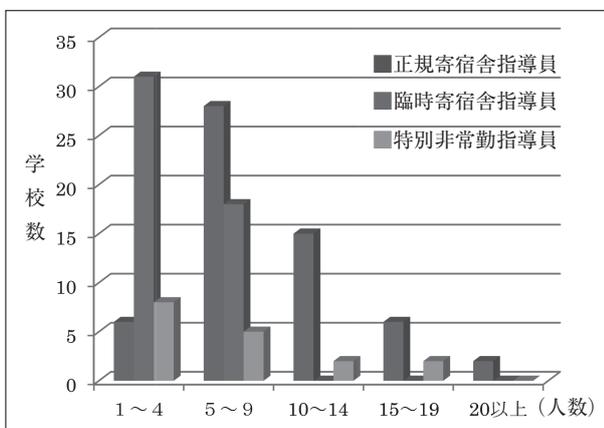


図5 雇用形態別の寄宿舎指導員数

(2) 舎生に育みたい力

寄宿舎指導員が舎生に育みたい力は何かについて、自由記述による回答を求め、内容的に整理・分析し、カテゴリー集計を行った(図6)。

その結果、177件中、「基本的生活習慣の確立」が46件(26.0%)で最も多く、次いで「社会性の育成」30件

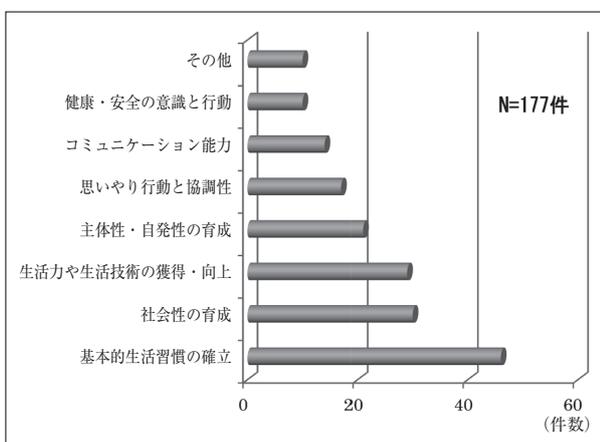


図6 舎生に育みたい力

(17%), 「生活力や生活技術の獲得・向上」29件(17.0%), 「自主性・自発性の育成」21件(11.9%), 「思いやり行動と協調性」17件(9.6%), 「コミュニケーション能力」14件(7.9%)であった。

寄宿舎の生活指導において育みたい力は、種々ある中で、舎生の自立と社会参加のために、とくに「基本的生活習慣」、「社会性」、「生活力や生活技術」、「自主性・主体性の育成」、「思いやり行動と協調性」などの育成に向けられていることが認められる。

(3) 寄宿舎における生活指導の内容別の実施

寄宿舎の生活指導における内容別実施状況について示した結果である(図7, 8, 9)。

各項目の平均値が3.5以上は、生活指導をかなり実施している内容で、逆に、平均値3未満の項目は生活指導があまり実施されていない内容であると読み取ることができる。以下に、その結果について述べる。

① Q01～Q10の項目は、基本的生活習慣に関する内容である。「身だしなみに関する指導」は平均値3.4であるが、その他の「食事に関する指導」、「洗面・衛生に関する指導」、「入浴に関する指導」、「寝具に関する指導」、「整理整頓に関する指導」、「洗濯に関する指導」はすべて平均値3.5以上で、積極的に生活指導が実施されている内容である。

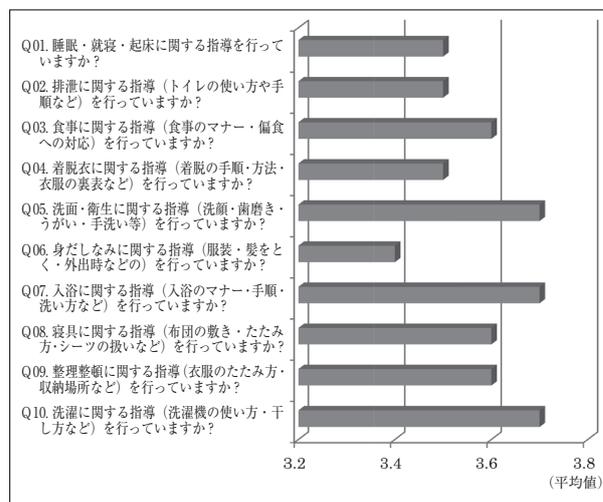


図7 生活指導の内容別の実施①

② Q11～Q19の項目は、健康・安全、リビングスキル、礼儀・言葉遣い等に関する内容である。「健康に関する指導」や「安全に関する指導」、「礼儀に関する指導」や「会話に関する指導」ならびに「言葉づかいに関する指導」、「掃除に関する指導」、や「買い物に関する指導」などは平均値が3.1以上あり、比較的に生活指導が行われている内容である。それに対して、「調理に関する指導」と「帰省に関する指導」は平均値2.5以下で、あまり実施されていない指導内容であると認められる。

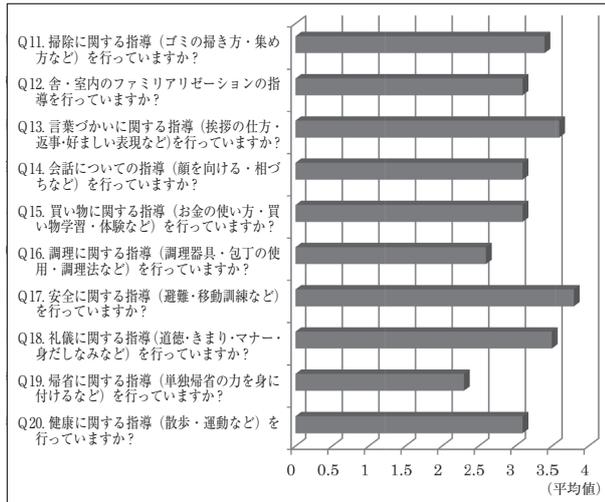


図8 生活指導の内容別の実施②

③ Q21～Q30の項目で、「学習面に関する指導」, 「性に関する指導」, 「キャリア教育に関する指導」, 「情報機器活用の指導」, 「歩行・移動の指導」, 「社会経験拡大の外出指導」などは平均値が3未満で, あまり生活指導が実施されていない内容であると認められる。これらの内容は, 寄宿舎独自の指導というより, 学校や家庭と連携して実施していく指導内容のためだと考えられる。

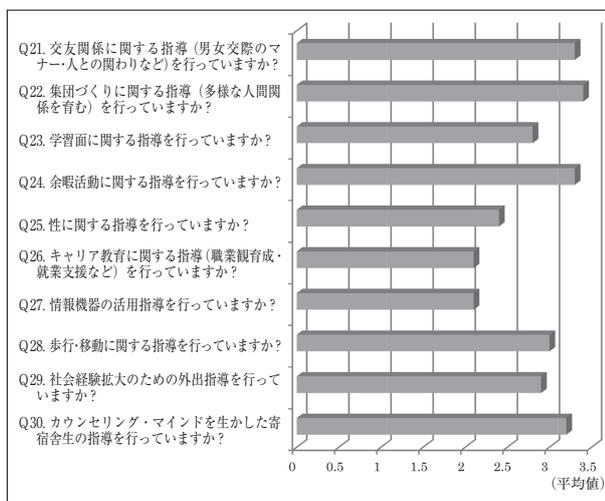


図9 生活指導の内容別の実施③

以上のことから, 日常生活の基本的な生活習慣に関する生活指導や, 健康・安全, リビングスキル, 礼儀・言葉遣い等に関する生活指導などはよく実施されていると認められる。それに対して, 舎生の学習, 性やキャリア教育, ならびに情報機器活用, 歩行・移動, 社会経験拡大の外出などの生活指導はあまり実施されていないことが認められた。あまり実施されていない生活指導については, 学校や家庭と連携して進めていくことが課題であるといえる。

(4) 個別の生活指導・支援計画

寄宿舎独自の「個別の生活指導計画」は, 57校中52校(91.2%)の寄宿舎が作成していると回答した(図10)。

舎生一人ひとりのニーズに応じていくためには「個別の生活指導計画」を作成し, 生活指導を行うことが共通の認識となっているといえる。これはまた, 学校の「個別の指導計画」と関連して, 寄宿舎の「個別の生活指導計画」も作成されていると考えられる。

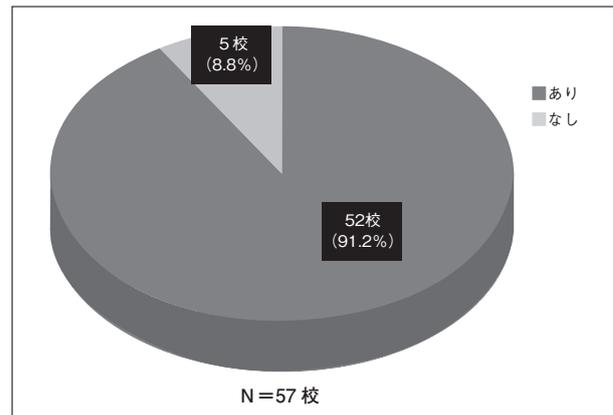


図10 個別の生活支援計画の有無

(5) 個別の生活指導・支援計画の意義

寄宿舎の「個別の生活指導・支援計画」を作成する意義について, 自由記述による回答を求め, 内容的に整理・分析し, カテゴリー集計を行った(図11)。

その結果, 回答94件中, 「寄宿舎指導員間の指導方法の共通理解」が28件(29.8%), 「舎生の的確な実態把握と指導・支援」が26件(27.7%), 次いで「家庭・保護者との連携」が13件(13.8%)で, 「学部・学級担任との連携」8件(8.5%), 「目標・見通しのある支援」8件(8.5%)であった。

このことから, 寄宿舎における「個別の生活指導計画」の作成は, 指導員間での指導方法の共通理解や, 舎生の的確な実態把握等に有効であると捉えられている。

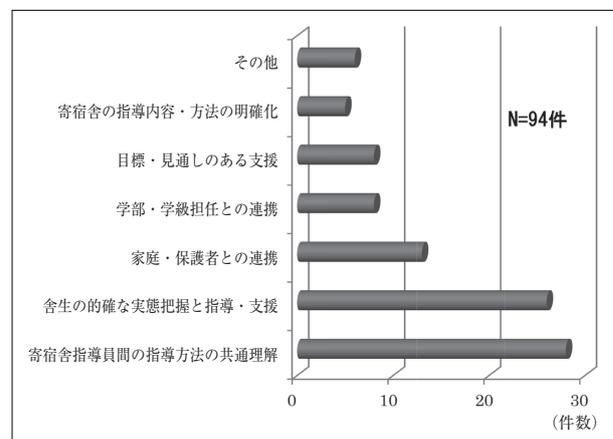


図11 個別の生活支援計画の意義

(6) 個別の生活指導・支援計画は、だれが・どのように作成しているか？

個別の生活指導・支援計画は、誰がどのように作成しているかについて分析した（図12）。

その結果、回答45件中、「担当指導員が作成し、寄宿舎全体で検討・確認」が23件（51.1%）、次いで「担当指導員が作成し、主任が確認」が13件（28.9%）、「担当指導員が作成し、グループで検討・確認」が8件（17.8%）であった。

この結果から明らかのように、7割強の寄宿舎は担当指導員が作成し、それを寄宿舎指導員すべてで検討・確認するという方法が採られている。生活指導の目標や内容・方法については、寄宿舎指導員のすべてが共通に理解しておくことが、指導の引き継ぎや指導の一貫性のうえからも大切であると認識されている。

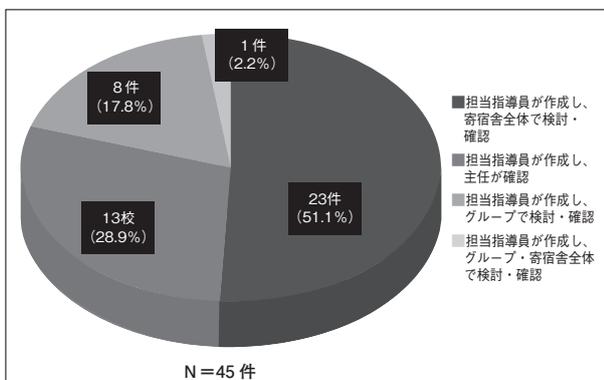


図12 個別の生活支援計画の作成者と方法

(7) 寄宿舎での生活指導の工夫

舎生の生活指導において、寄宿舎独自に作成・工夫し、活用している支援教材はあるかについて調べた。種々の回答が寄せられたが内容的に整理・分析し、カテゴリー集計（頻度）を行った（図13）。

その結果、回答70件中、「寄宿舎内の触図・立体模型等による環境認知」が11件（15.7%）、「衣類・衣服の着脱・畳み方・分別」が10件（14.3%）、「洗濯物干し・

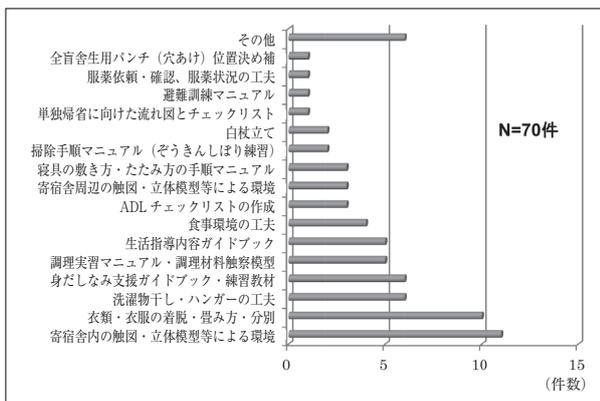


図13 寄宿舎での生活指導の工夫

ハンガーの工夫」6件（8.6%）、「身だしなみ支援ガイドブック・練習教材」6件（8.6%）、「調理実習マニュアル・調理材料触察模」5件（7.1%）、「生活導内容ガイドブック」5件（7.1%）であった。

寄宿舎では、舎生の実態に応じて、生活力・生活技能を高める種々の創意・工夫を行いながら指導・支援を行っていることが分かる。

(8) 家庭との連携の方法

家庭と寄宿舎の連携はどのような方法で行っているか、自由回答を内容的に整理・分析し、その頻度をカテゴリー集計した（図14）。

その結果、回答165件中、「個別面談」が46件（27.9%）と最も多く、次いで「電話」41件（24.9%）、「連絡帳」32件（19.4%）、「送迎時の会話」29件（17.6%）、「帰省、帰舎時の報告・連絡・相談」8件（4.9%）、「寄宿舎通信・便り」7件（4.2%）であった。

連携の方法については、必要に応じた現実的な方法が採られているといえる。

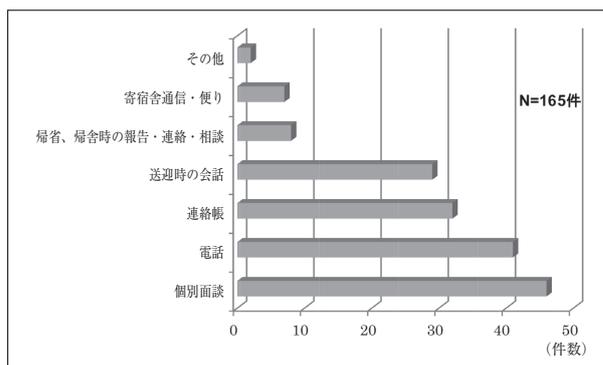


図14 家庭との連携の方法

(9) 家庭と寄宿舎の連携の内容

家庭と寄宿舎の連携内容について、自由回答を内容的に整理・分析し、その頻度をカテゴリー集計した（図15）。

その結果、回答120件中、「リビングスキルの確立・般化」が50件（41.7%）で最も多く、次いで「基本的な生活習慣の確立」34件（28.3%）、「心身の健康面での共

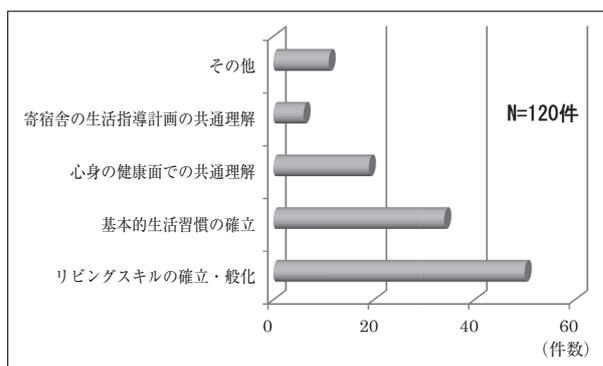


図15 家庭との連携の内容

通理解」19件(15.8%)、「寄宿舎の生活指導計画の共通理解」6件(5%)であった。

このことから、「リビングスキルの確立・般化」や「基本的生活習慣の確立」は、生活面における般化という側面から、とくに家庭との連携が必要とされる内容であることが認められる。

(10) 学校・学部との連携方法

学校・学部と寄宿舎の連携はどのような方法で行っているか、自由回答を内容的に整理・分析し、その頻度をカテゴリー集計した(図16)。

その結果、回答166件中、「連絡帳」が45件(27.1%)で最も多く、次いで「登下校・送迎時の報告・連絡」34件(20.5%)、「学級担任との連絡会」26件(15.7%)、「学舎連絡会・懇談会」20件(12.1%)、「ケース会議」14件(8.4%)、「職員朝会・学校会議への参加」7件(4.2%)、「電話」5件(3%)であった。

以上の結果から、学部・学級担任との連携は、日々の連携が重要であり、必要に応じた現実的な方法が採られているといえる。

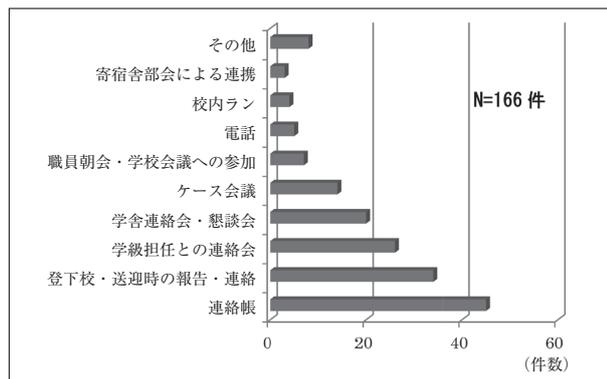


図16 学校との連携の方法

(11) 学校・学部との連携内容

学校・学部と寄宿舎の連携内容について、自由回答を内容的に整理・分析し、その頻度をカテゴリー集計した(図17)。

その結果、回答126件中、「健康・体調面の管理」が28件(22.2%)で最も多く、次いで「舎生の実態の共通理解と指導の一貫性」24件(19.1%)、「学習面や生活面の連携」18件(14.3%)、「学校・学部の行事・活動への参画」10件(7.9%)、「基本的生活習慣の支援」8件(6.4%)、「学校・学部の指導計画との連携」8件(6.4%)、「個別の生活指導・支援計画の作成」7件(5.6%)、「家庭・保護者への対応」7件(5.6%)であった。

このことから、「健康・体調面の管理」は舎生の学舎生活の充実のために、また「舎生の実態の共通理解と指導の一貫性」は舎生の理解等に混乱を引き起こさないために、必要な連携内容であると認められる。

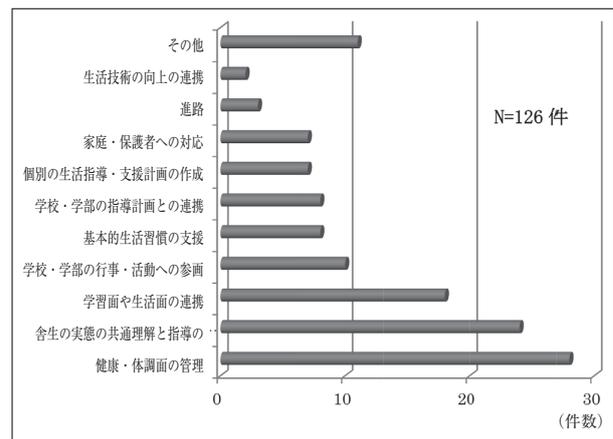


図17 学校との連携の内容

(12) 寄宿舎指導員の専門性の向上

寄宿舎指導員はどのような方法で専門性の向上を図っているか、その自由回答を内容的に整理・分析し、カテゴリー集計(頻度)を行った(図18)。

その結果、回答134件中、「学校内研修」が40件(35.1%)と最も高く、次いで「学校外研修」47件(29.9%)、「寄宿舎内研修」39件(29.1%)であった。

具体的に研修内容を見ると、「学校内研修」では、視覚障害の理解と支援の基礎・基本の研修として、①眼疾患と見え方および支援法、②点字の読み書きと音声パソコンの研修、③歩行・手引きなど疑似体験を伴う研修などが学校教員、歩行指導員、生活訓指導員、視能訓練士(ORT)などによる専門研修を受けていた。

「学校外研修」では、①各都道府県が主催する各種研究・研修会、②全日盲研、特総研、ライトハウス、教育センター等の研修プログラム、③寄宿舎指導員研修会などへの研修の参加がみられた。

「寄宿舎内研修」では、①リビングスキルの生活技能支援法、②舎生の事例研究、③出張者報告研修などであった。

すなわち、寄宿舎指導員の専門性向上のために、研修の回数は不明であるが、比較的に専門性の向上を図る研修の機会はあることが認められる。

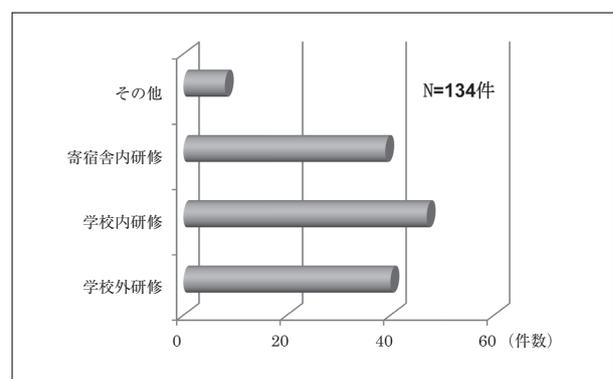


図18 専門性向上の研修

(13) 寄宿舎指導員の専門性を図る理由

寄宿舎指導員の専門性を図る理由について、自由回答を内容的に整理・分析し、カテゴリー集計（頻度）を行った（図19）。

その結果、回答89件中、「舎生の生活指導の向上」が24件（27.0%）と最も高く、次いで「舎生のニーズに応じた支援」15件（19.9%）、「障害の重度・多様化への対応」14件（15.7%）、「専門的な知識・技能の習得」12件（13.5%）、「障害特性の理解と支援法」11件（12.4%）、「保護者への支援や対応」4件（4.5%）であった。

この事実から、寄宿舎指導員の職務が舎生の生活指導にあるので、個々の舎生の自立や社会参加に向けた生活指導を行うために専門研修が必要であると認識している。また、舎生の重度・多様化に伴う障害理解や、個々のニーズに応じた支援が必要なためであると認められる。

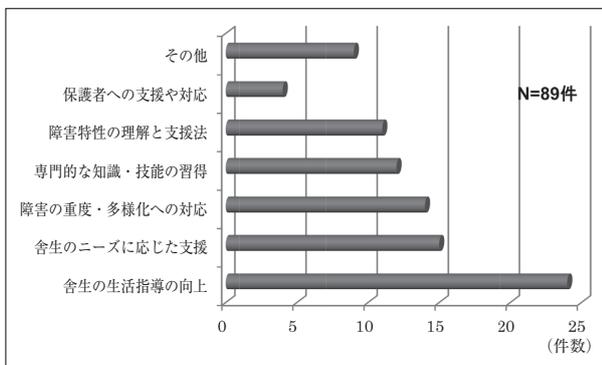


図19 専門性向上を図る理由

(14) 寄宿舎の課題

寄宿舎の課題については種々の回答が寄せられた。自由回答を内容的に整理・分析し、カテゴリー集計（頻度）を行った（図20）。

その結果、回答127件中、「舎生の減少に伴う課題」が35件（27.6%）と最も高く、次いで「寄宿舎指導員に関する課題」19件（15%）、「舎生の指導・支援に関する課題」19件（15.0%）、「障害の重度・重複化、多様化」18件（14.2%）、「寄宿舎の在り方・存在意義」17件（13.4%）、「寄宿舎の施設整備・安全管理」8件（6.3%）であった。

寄宿舎の課題では、特に舎生の減少に伴う自治活動や社会性の育成に難しさを感じているとの回答が多く認められた。また舎生の重度・重複化や障害の多様化に応じた生活指導にも課題があるとの回答も多くみられた。

寄宿舎の課題の多くは、舎生の減少に伴うことから派生している。しかし、寄宿舎は学校、家庭、地域との連携により、生活支援と発達支援の役割を果たすことが求められている。このことを考えると、舎生一人一人のニーズに応じた生活指導の一層の充実と連携協力の枠組みを模索していく必要があると考えられる。

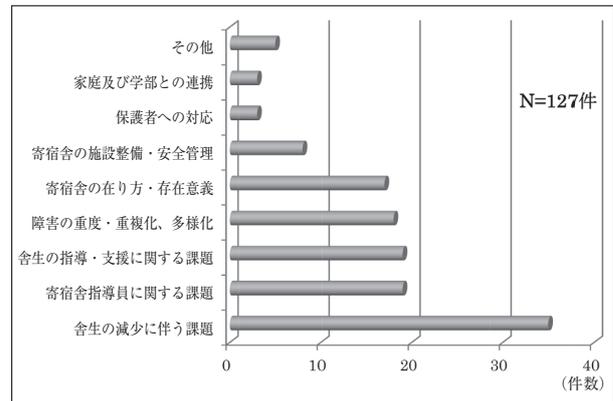


図20 寄宿舎の課題

Ⅳ 総合的考察

全国盲学校（視覚特別支援学校）の寄宿舎における生活指導について実態調査を行った。以下に、その結果を踏まえ、寄宿舎における生活指導について若干の総合的考察を行う。

(1) 寄宿舎の社会的機能・役割として、①通学の保障、②生活の保障、③健康と発達の保障の3つがある。しかし、今回の調査から時間的に遠距離の舎生は必ずしも多くはなかった。このことは、入舎理由が通学困難のためではなく、寄宿舎に対する別のニーズにあると考えられる。すなわち、自立や社会性の獲得、障害の重度・多様化に応じた支援、同じ障害のある児童生徒同士の生活、家庭事情などにより、保護者や舎生の寄宿舎へのニーズが多様化しているといえる。このニーズは、生活支援と発達支援のニーズであり、寄宿舎の果たすべき役割である。このことを踏まえて、寄宿舎における生活指導は展開していくことが求められる。

(2) 今回、舎生に育みたい力として、「社会性の育成」や「思いやり行動」が挙げられた。この「思いやり行動」は社会的スキルや社会生活力の獲得と正の相関関係にあると指摘されている（渡辺ほか，2004；大城，2015）。このことは、「日常生活の基本的動作、習慣、態度を育むこと」、「集団生活に必要な技能や態度を養うこと」、「身近な社会とかかわる力を育むこと」、「自立的生活の基礎的能力と態度を育てること」のひとつひとつが、じつは社会性や思いやり行動の育成につながるということを示している。このような観点から、生活指導についても再考する必要がある。

(3) 寄宿舎の課題の一つに、「障害の重度・多様化への対応」が挙げられた。重複の舎生の場合、担当指導員は担当舎生の拠り所（拠点の形成）となる必要がある。この場合、重複舎生は個別の生活指導の形をとらざるをえない。集団での生活指導に移行していく前に、複数の

指導員による舎生集団への関わりの中で、T・T方式で支援を行っていくこと必要がある。その際、舎生に今どのような力があるのか、その力を十分に発揮できる手立てや環境が整えられているかを考え、生活指導を進めていくことが求められる。

V まとめ

以下に今回の調査結果をまとめておく。

1. 全国盲学校（視覚特別支援学校）寄宿舎の舎生1031名中、高等部舎生が64.2%を占め、中学部舎生22.9%、小学部舎生12.9%であった。舎生の性別では、男子舎生が女子舎生に比べ多く、特に高等部では男子舎生432名（66.8%）が女子舎生230名（35.7%）の約2倍であった。
2. 通学にかかる時間別の舎生数は、舎生1026名中、1時間以上～2時間未満が50.6%、1時間未満が29.6%、2時間以上が19.8%であった。
3. 寄宿舎にける舎生数の範囲は、57校中、10～19名が最も多く30校（52.6%）、1～9名が11校（19.3%）、20～29名が10校（17.5%）であった。
4. 寄宿舎指導員の正規寄宿舎指導員は、57校中、5～9名が28校（49.1%）、次いで10～14名が15校（26.3%）であった。一方、臨時寄宿舎指導員では、49校中、1～4名が31校（63.3%）、次いで5～9名が18校（47.1%）であった。
5. 寄宿舎指導員が舎生に育みたい力は、177件中、「基本的生活習慣の確立」が26.0%、次いで「社会性の育成」17%、「生活力や生活技術の獲得・向上」17.0%、「自主性・自発性の育成」11.9%、「思いやり行動と協調性」9.6%、「コミュニケーション能力」7.9%であった。
6. 生活指導の内容別実施状況では、身だしなみ、食事、洗面・衛生、入浴、寝具、整理整頓、洗濯などの基本的生活習慣に関する指導は、平均値3.5以上で積極的に実施されていた。また、健康・安全、リビングスキル、礼儀・言葉遣いなどに関する指導も、平均値3以上で比較的に実施されていた。それに対して、学習面に関する指導、性に関する指導、キャリア教育に関する指導、情報機器活用の指導、歩行・移動の指導、社会経験拡大の外出指導などは、平均値3未満であり実施されていなかった。
7. 寄宿舎独自の「個別の生活指導計画」は、57校中52校（91.2%）の寄宿舎が作成していた。
8. 「個別の生活指導・支援計画」の作成意義は、94件中、「寄宿舎指導員間の指導方法の共通理解」29.8%、「舎生の的確な実態把握と指導・支援」

27.7%、次いで「家庭・保護者との連携」13.8%、「学部・学級担任との連携」8.5%、「目標・見通しのある支援」8.5%であった。

9. 「個別の生活指導・支援計画」の作成方法は、45件中、「担当指導員が作成し、寄宿舎全体で検討・確認」が51.1%、次いで「担当指導員が作成し、主任が確認」28.9%、「担当指導員が作成し、グループで検討・確認」17.8%であった。
10. 寄宿舎独自に作成・工夫している支援教材では、70件中、「寄宿舎内の触図・立体模型等による環境認知」15.7%、「衣類・衣服の着脱・畳み方・分別」14.3%、「洗濯物干し・ハンガーの工夫」8.6%、「身だしなみ支援ガイドブック・練習教材」8.6%、「調理実習マニュアル・調理材料触察模」7.1%、「生活指導内容ガイドブック」7.1%であった。
11. 家庭と寄宿舎の連携方法は、166件中、「連絡帳」27.1%で、次いで「登下校・送迎時の報告・連絡」20.5%、「学級担任との連絡会」15.7%、「学舎連絡会・懇談会」12.1%、「ケース会議」8.4%、「職員朝会・学校会議への参加」4.2%、「電話」3%であった。
また、連携の内容は、120件中、「リビングスキルの確立・般化」41.7%で、次いで「基本的生活習慣の確立」28.3%、「心身の健康面での共通理解」15.8%、「寄宿舎の生活指導計画の共通理解」5%であった。
12. 学校・学部と寄宿舎の連携方法は、126件中、「健康・体調面の管理」22.2%、次いで「舎生の実態の共通理解と指導の一貫性」19.1%、「学習面や生活面の連携」14.3%、「学校・学部の行事・活動への参画」7.9%、「基本的生活習慣の支援」6.4%、「学校・学部の指導計画との連携」6.4%、「個別の生活指導・支援計画の作成」5.6%、「家庭・保護者への対応」5.6%であった。
また、連携の内容は、126件中、「健康・体調面の管理」22.2%、次いで「舎生の実態の共通理解と指導の一貫性」19.1%、「学習面や生活面の連携」14.3%、「学校・学部の行事・活動への参画」7.9%、「基本的生活習慣の支援」6.4%、「学校・学部の指導計画との連携」6.4%、「個別の生活指導・支援計画の作成」5.6%、「家庭・保護者への対応」5.6%であった。
13. 寄宿舎指導員の専門性の向上は、134件中、「学校内研修」が35.1%、「学校外研修」29.9%、「寄宿舎内研修」29.1%であった。
14. 寄宿舎指導員の専門性を図る理由では、89件中、「舎生の生活指導の向上」27.0%、「舎生のニーズに

応じた支援」19.9%、「障害の重度・多様化への対応」15.7%、「専門的な知識・技能の習得」13.5%、「障害特性の理解と支援法」11.24%、「保護者への支援や対応」4.5%であった。

15. 寄宿舎の課題は、127件中、「舎生の減少に伴う課題」27.6%、「寄宿舎指導員に関する課題」15%、「舎生の指導・支援に関する課題」15.0%、「障害の重度・重複化、多様化」14.2%「寄宿舎の在り方・存在意義」13.4%、「寄宿舎の施設整備・安全管理」6.3%であった。

引用及び参考文献

- 荻原佳明（2009）：知的障害特別支援学校の寄宿舎における生活指導に関する調査研究. 上越教育大学大学院修士論文.
[http:// www.juen.ac.jp/handi/syuronyoushihtml/syuronyoshih21.html](http://www.juen.ac.jp/handi/syuronyoushihtml/syuronyoshih21.html)
- 北海道教育委員会（2008）：特別支援教育に関する基本的指針. 北海道教育委員会.
- 原田知美・船橋篤彦（2001）：生活教育の場としての特別支援学校寄宿舎の現状と課題－教員・寄宿舎指導員への面接調査から－. 愛知教育大学紀要 61, 27-33.
- 小田 史（2005）：障害児の寄宿舎における生活教育. 大阪健康福祉短期大学紀要, 第3号, 49-56.
- 小野川文子（2013）：特別支援学校の寄宿舎教育に関する研究の動向と課題. 特殊教育学研究, 50 (5), 451-461.
- 小野川文子・高橋智（2010）：全国寄宿舎併設特別支援学校（肢体不自由）の保護者・教職員からみた寄宿舎教育の役割と課題. 障害者問題研究, 38 (3), 79-95.
- 大城英名（2013）：知的障害生徒の思いやり行動尺度の作成. 秋田大学教育文化学部研究紀要 教育科学部分門, 68, 87-95.
- 島根県教育委員会（2005）：島根県における今後の特別支援教育の在り方について. 報告の概要, 島根県教育委員会.
- 渡辺広人・松崎展也・佐藤公代（2004）：児童の仲間集団形成に及ぼす遊びの役割－調査法の試み－. 愛媛大学教育学部紀要 教育科学, 第50巻, 第2号, 73-81.